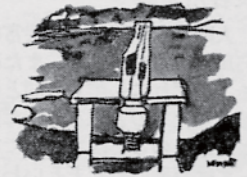


村元俊郎

- 山奥住いの私はいろいろの酒を作ります。
 ガンコウラン……紫で高貴な風味です。
 苔桃……うす桃色で味も絶品です。
 朝鮮五味子……ジンの香とピンクの美しい酒です。
 その他、グミ、桑の実、野いちご、こくわ、山ぶどう等。10指を越えます。何れもそれぞれの素適な味を持っています。
- いろいろの花の咲く木を植えました。
 すももが一番先に咲きました。これから、りんご、梨、栗、桃、ライラック、つつじ、バラ等、これも20指を越えます。1～2を除いては、香のよい花ばかりです。
- 女性については、出合った方は年齢に関係なくみんな美しいと信じています。
- ※3者共通点について＝色、香、味覚（失礼）それぞれ快よい多様性をもっているらしいです。男は、これがなければ死んだようなものだと申す方もあるぐらいです。
- ※相違点について＝酒と花については、見頃や熟成などおのづと時期がある。女性については、色合い、年齢、大小等いろいろあるそうですが、それぞれのよさがあり、良くも悪くもこちら側の接し方に問題であるので、大切に扱うに越したことがないと聞き及んでおります。さて、何の何を書いているのでしょうか。私自信わからなくなりました。多謝。



八木保次

誰が出したのか知らないが、すごい題である。恐しいものをそろえたものだ。大たん不敵というか、コントラストが凄。化けて出そうな題だ。僕にはとても歯がたたない。故に一句

花見酒 女のひざの浮舟や、



高橋北修

西村徳一

酒はずい分飲んだはずだが、今だに酒の味を理解することが出来ない。どうせ飲むならウマイと感じて飲みたいと思うのだが……。特級でも2級でも、酒でもビールでも、別に何ということなく只飲むだけ。

その代り、女にかけては天下一品、特級、1級、2級の区別ならコンピューターよりも早い。花については「トゲがあってもバラの方が良い」と思う程度。

酒には、縁がありすぎて、俺の体はこのていたらく。そのくせ、酒はそれほど好きでなかった。ただ若い頃から、身边には、飲んべいが多すぎた。画友、アナキストの群れ、社会主義の一派、地元のやしの連中。俺にはイデオロギーなんて無いから、どんな奴とでもつき合う。飲みながら、盛んに議論をした。当時の若い者は、よく議論をした時代だ。それ等が入り乱れて、二階の俺の部屋で毎日、朝から飲み始める。一組去れば次の奴等が酒を持って現われる。夜は、俺が金をせびる、中小事業家の友達がかわるがわる俺を夜の街に誘い出す。朝まで、はしごで飲み明かすのだ。そんなことが続いているうち、戦争突入で酒がはいらなくなって、命拾いをしたと思ったのが実感だ。このまま酒が続いたら、命とりになると半ば諦めていた。

そんな日常が続いたので、女とは全く縁がなかった。といっても、女は大好きだ。惚れっぽくて追い廻すが、皆逃げてしまう。好きな女性に好意を示すときは、殆んど酔っている最中だ。ホールの中を、女性を追い廻して、気が付いたときは裸足のままなんてことは再々である。これでは、持ってっこない。酔わないとき、しんみり口説こうと思うが、そんな静かな機会は全く無かった。

次は花である。花の咲く植物は、皆好きだ。殊に、日陰に咲く花が大好きだ。かぼちゃの花、芋の花など可憐である。黒百合は個性的。なでしこ、松葉牡丹の花に、幼い頃の郷愁がある。

藤井 正

酒……その頃は戦時中であった。ハダンで校内を歩き、職員室のストーブの前にとっかかあぐらをかき、手のひらに火だねをとってキセルでスパスパたばこを吸う校長であった。笑えば目を細くし、怒ればギョロ目。とにかく、かけだし先生の小生には偉大な存在ではあった。その校長に「一パイヤらんか」とさそわれて一夜、校長と酒くみかわしたのが忘れられない。正中（マサナカとその頃呼んでいた）とたくわんのまずしいぜんであったが、そして何を話したのか今はさだかではないが、よっぽど楽しい一夜であったに違いない。

女……夜空に輝やく星の如き君の瞳、におい優しい君の長い黒髪、花のような君の唇……etc.

シラノ・ド・ベルジュラックのご出場をまつまでもなく、女性をほめたたえることばは、とめどもなく出てくる。これが男性の場合、「ブルーのえのぐをとかしたような君のひげのそりあと……」などといっても、いっこうにさえない。ああ、女性よ永遠に美しくあれ。花……その美しさをほころが故に、ひとしお淋しさを感じる。オールドボーイの哀愁を、そこはかたなく感ずる年とはなりにけり、か。

さて、今宵はるかネオンまたたくすすきの街を望み、アイヌネギで安酒をくみかわすことにするか……。

◎酒と女と花

長谷川常雄

人間と酒の関係は、非常に古い歴史年代までさかのぼってあったようだ。日本では遠く邪馬台の国の頃より、また西洋においてもバカスなる神によって与えられたようである。いずれにしても人間との関係は古い。また、女と酒の関係も相当古い時代から付合いがあったものと思う。ただ残念ながら、私は考古学者でもないし歴史学者でもないの、これ以上のことはさだかでない。酒は古き時代から飲む量によっては、或はその状態によっては百薬の長などといわれ、またある状態では生命をむしろ媒体ともいわれる。人体とアルコールについての利害関係も、医学者でない私には、比較的浅い知識より持ち合わせてはいない。

以上のことはともあれ、酒と女となれば、古今東西を問わず話題には事かかぬものがある。適度な量をたしなむ時の女は、非常に艶やかな花となり、いい知れぬ風情というか情緒をその場に添えるものである。日本画などでは、過去に幾多の画家がそれらを見事に表現している作品に、何度か接したことが記憶に残っている。それらには華、華、花、花というものを感したものだ。しかし、一度これがリミットをオーバーすると、全く一変する。泥酔して大声で叫びわめく、大虎となると始末が悪く、鼻、鼻と鼻もちなくなるものである。



花岡

スナッフ

吞ませてくれとって、若い連中が来ることがある。私はドクターストップでお相手もできないのだが、私の手製のばら酒がうまいとおっしゃる。

もう古い花でクリムスグロリーという赤いばらが、今ではリストにもものっていない位だけれども、このばらは一花で部屋中を香り一杯にする。独乙のホルデスが1935年に作出したかつての名花である。

ホワイトリカー1本にこの花を4~5花、若干の砂糖と共にいれて一晩おいて取出す。微量の酸を加えると香りがにげない。ただこれだけのことでけれども、2~3カ月置くと人はよい酒といってくれる。

近頃手入れもしないので、香り高い花が咲いてくれない。昨年などは、とうとうばら酒を作れずに終ってしまったが、花を眺めかつ酒を作って呑むというのでは、あまりに実利的ということにならうか。花はそれを本望と思ってくれるであろうか。ともあれ、私にとっては一つの楽しみではある。

諏訪田勝衛

◎酒は好きな方だが車の運転に昼酒はゴハット、おかげで最近酒の量は減った。酒のうちでも日本酒の方に手のである方である。◎女の価値、特に主婦の重要性を最近再認識している。というのは、家内の入院で毎日の訪問客の相手に閉口している。女の居ない生活の不自由を、つくづく感じている。◎花はどんな花でも好きだ。時おり道内外旅行の折、珍しい花木があれば集めて来て、家の庭に植えている。広い庭はそれ等の花木でにぎやか、特に赤い花の咲く花木が好きだ。



一原有徳

めぐり逢い

日本人でありながら、日本酒は体質に合わない。ブランデーの匂いは好きだが、味が異質だ。世界のどこかに、あるいはカクテルに、私をとりかざる酒は、きつとあると思う。

好きな花と問われれば、即座にケン。ヒナゲン、オニゲン、いやこれよりも栽培禁止という花を見たときは、その場を離れ難かった。阿片をとるケンを見たことがない。その中でも、白いケンの花は私を魅了するであろう。

断崖の上に私をまねく、ふくよかな匂いと、ゆるるコロナの色にひかれて、ひたすら攀ち登った。頂上のそれは、径1センチもある合歓の花であった。茎を手折ったとき、私は真逆かさまに転落した。夢から覚めると、そこに骨だけになったカラ傘があった。

長い人生、いや短い人生の中で、さらに自由のない世の中で、これら恍惚の世界にめぐり逢うことは、私にはまだあるような気がしてならない。

伏木田光夫

裸婦考

僕が裸婦を初めて描いたのは高校2年の時だった。夏の北大は気持良かった。原精一氏と初めて会ったのも、この裸婦描きの日であった。あれから僕は明けても暮れても裸婦を描いている。一年半の巴里の研究所で、僕はスペイン女もフランス女もアメリカ女もジャワの女も描いた。目をつぶると、いろいろな女達が笑い通りすぎる。僕の目は、いつしか職業人の目になって、電車にのっても、首のフォルムからすばやく服を通して、女達の裸をたちまちデッサンしてしまふ。ああ女達、すべてを包含し大地と結婚する者達。僕はあこがれ、きづつきながらもお前達の方に行きたいのだ。僕は考える前に、全身で女に引かれた。そのフォルムは、海のようにも山のようにも宇宙のようにも変貌し、とらえ難いので、ますます引かれるのだ。裸婦はイデーとなり、空間となり、光となり、ますます広がるがります。お前の方に愛の導きで歩いていっても、お前はつかまえる前に逃げてしまふだろう。女ほど好きなものはなく、裸婦より美しいものを僕は知らない。裸婦考——狂い死と見たい。

●酒と女と花

三箇三郎

童話・酒と女と花
「ハチ」は花の色香と、みつの甘酒に引きよせられて、働き続けました。

ある日、美しい女王様にさそわれて、空高く舞い上がりました。……帰って来たのは？女王様だけでした。

となり村の「カマキリ」さんも、奥さんにたった一度で、殺されたそうです。

ま——おそろしい。



峯田敏郎

「散りてこそ、いとど桜のめでたけれ」。「花の色は、移りにけりないたずらに、わがみよにふるながめせしまに」。酒と女と花、というテーマをみた時、とっさに私の頭にひらめいたのはこの二句である。これはまた、めずらしく高級で粋なテーマを与えられたもの……と本気で困惑したものだ。

前の句は風姿花伝（世阿弥）の中から、後の句は美人のほまれ高い小野小町の句という。能芸術の極地を花にたとえたのが世阿弥であり、美人の（現世の）はかなさを花にたとえたのが小町である。普遍的なものを花にたとえるか、一時的なものを花にたとえるか、その対称はおもしろい。いずれにしろ、花は散るものであることを、さけ難い事実としてこの二句の発想がある。「散ってはじめて花のめずらしさがあり、どんなすばらしいものでも一年中みせられてはつまらぬもの……」と哲人世阿弥は花をみる。「私もしらぬまに年老いたものよ。かつての美しさはいずこや。現実には花のように一時的なものよ……」と美人小町は花をみる。

そして凡人小生は、というと仕方なしに酒をのむ。



手島圭三郎

酒・夜9時30分は制作を止めて酒をのむ時間である。今までの張り切っていた弓の弦をゆるめてははずすような気持である。飲まねば緊張感がとれずに安眠できない恐れがある。少し飲めば、なにもかも忘れてすぐねむるのである。それが日課である。なにはともあれ、一日の制作をふり返りながら飲む酒は、人生の充実感を最大にもたらし、幸福な気持にしてくれる。都合で制作できなかった日は、別に飲む必要はないのである。

女・ここ3～4年は、画面の中心に女が出てきた。顔が丸く目が大きく長い髪の少女である。あまりおなじ調子に気がついて、もっと別なものをつくり出した。鳥、魚、馬と少女には魚のしっぽがつ

いて人魚とした。これがなかなかおもしろいと思っている。神秘的な海へのあこがれであろうか。少年時代に毎日眺めた海のイメージであろうか。しかし、人魚は顔が丸く、目が大きく、長い髪はそのままである。

花・すみれの花を画面に散らして3年ばかり、これもマンネリ化した。最近の花は自分なりの花で、なんの花かよくわからない。それも海に咲く花であり、魚が口からはき散らす花でもある。来年の花はどんな花になるのであろうか。自分の進む方向が自分にもわからない。このわからないのが絵をかく最大のおもしろさであろうが、大変に不安なことでもある。



大友一夫

スナップ

酒よし、女またよし、花またまたよし、人生は長いようで短いもの。人間を裏切らない人間でありたいもの。



渡会純价

酒・女・花
ボクにとって
こよなく愛するもの。

池谷虎一

自分下戸であるが、毎年果実酒を作る。庭の果樹の実を利用するのである。コクワ、ブドウ、アンズ、ユスラウメは生食してはあまり美味くないので、酒にしてしまうのである。この中でユスラウメの紅く熟れたので作ると、クリームソーレーキを溶かしたような美しい色になり、味も甘く、ご婦人向きである。

10年程以前に、生垣にしているハマナツの実で作ったことがある。ハマナツは花も美しいが実も赤く、累々として見事である。1日、北海道新聞社の記者君と公民館の連中が来て、一升あまりあったハマナツ酒を平らげて、道新のコラム欄に、ハマナツ酒は中々うまい、北海道名物にして売出した方がよい等と出た。2～3日して記者君から、ハマナツで酒を作るのは、許可されている範囲外で酒造法違反だと、税務署から注意があったという報らせである。

ハマナツ酒は一寸癖がある。その後、実の大部分を占める種子を除くのが厄介で作っていないが、家庭で許可されている果実の範囲が広がったので、今では差支えないのではないかと思う。

◎酒と女と花



八木伸子

酒・男・花

お酒はほとんど飲みません。男も1人しか知らず、花は大好きだから、少しは何か書けそうですが、こうして考えてみると、私は、相当幼稚にすぎます。これらががんばります。

西村貴久子

最近、酒には絶縁に近いので昔の話になるが、ある年の春陽会の会場で、事務所か会場の一部が最早や暗くなりかけた中でベンチに腰かけた連中がいた。上野山、桜庭、岡田七歳の酒樽のようなと他に若い2~3人。そこへ甲斐仁代氏と2人で入って行った。皆何やらシャブルようにして食べている。下の食堂で前奏曲の油を泌みこまして来たらしい。岡田の七ちゃんが、キッコさんこれ食べなさい、とその一片を渡された。気味悪い色で、何かのクンセイかと思い、うっかり食べた。皆はじっとみつめていたが、やがて爆笑した。私は撫辱を感じ、甲斐氏に聞くとオットセイのだよといった。私は吐気がしてきた。

今は亡き先輩達が、体は酒樽と化しても気合のこもった連りがたまらなく懐かしい。男ではないが、正しく男なる2人、それは林美美子と甲斐仁氏。甲斐のアトリエでロレッツを廻らなくして私にカラム。二人は男は嫌いだった。画学生に一寸毛の生えたような私を着にして、飲みっ振りを教授した。2人共短軀の上に太っているので、飲み倒れると丁度、ビヤ樽のように転がり、朝まで不覚になっていた。シンと静まった野中の一軒家の夜半、無心に眠る2人の姿が泌々と好きだった。こんな油っこい私の先輩達は、皆野の花が好きだった。



千葉七郎

ものの本によると、南画に酒は、つきものであったらしい。墨をすっては酒をのみ、陶然となったところで一気に描きあげたという。禅の影響をうけた精神を直接造型化する絵には、いい方法かもしれない。世間に、エカキは酒のみと、きめている人の多い原因なのだろう。

私が教えをうけた先生は、制作のモデルがきまると、温泉につれ出して、泊まりこみでうちあわせをしないと、絵が描けないという大先生であった。秋の文展の会場でその大先生の裸婦の大作をみかけると、私達若い画学生は、「スケベ先生うちあわせすぎて絵の方はさっぱりじゃないか」と、手ひどい批評をしたものだ。

酒と女の嫌いな奴は、エカキになれないというこの大先生の教えに従って、私達の仲間は、のめない酒をのみ、学割で女買いに出かけて、懸命に修業した。そして、いまだに酒と女が大好きなので、きっぱりばなエカキになれることを信じている。日本には雪月花、ノム、ウツ、カウというのはあるが、酒と女と花などという語呂の悪い言葉は、元来ないものなのだ。

鵜川五郎

酒一ぼくは酒は飲めない。死んだ親父は3升酒をべろとやった。ぼくの方まで飲んでしまったらしい。酒を飲まないぼくからみれば、酒飲みは、素面の時はしゃちこぼっていて、飲むと酔ったふりして本性を曝す。しかし絵描きは、素面のくせに酔っぱらったように本性を曝す。

女一女は人間でなかった時は女だった。文明がこうも索漠と荒み、墮落してくると、女は男みたいになり、男は女みたいになり、何が何やら分からなくなってくる。いかれぼんちの世の中には、男も女も存在しない。メスとオスが絡まり合っているだけだ。

花一花は脆く、はかない。たまゆらの幻のように咲いては散る。15~6、花のように咲き初める少女も、その後4、50年も生きて老残を曝す。花はたまゆらに散るからこそ、幻のように美しい。だが、庭土を掘ってみると、球根が肝臓ジストマのようにびっしりと繁殖していて、無気味だ。花は脆く、はかなくても、その陰湿な植物の生は、人間以上に瘴猛である。

木村 良

何れにも関心深く魅力を感じながら、何れにも恵まれない生活が続いています。

花といえば当松前の桜が近年盛大に売り出されているが、唯素通りする程度で、花の下で盃を傾ける等といった風流心？は湧かない。むしろ花桜の初夏さんと降り注ぐ太陽の木の間越し漏れる中を、若葉色に染まりながら古蹟を尋ね歩く方が心もなごみ、画境へ通ずる何物かを感じとっている。花見時に見るあのぎらぎらした女まるだしのそれより、こんな時つましく散策する女の姿にその心境をさぐり出してみたい衝動にかられる。

「酒は独りつましく飲むべきもの」といった古人の言葉に興感を覚えるのも、斗酒なお辞せずとし瓶を軽くあけた昔日を懐しく思うのも年齢のせいだろうか——。否40歳、50歳は鼻つたれ小僧と実感している。

しかし、花より海、岩礁のとりこになって、見つめ眺め、喜び悲しみ、自分の絵に自惚れ、落胆している毎日を振返って、これからがほんとうの製作であることを信じ、花も酒も女も度外視した環境の中で意欲を燃やしている。



●酒と女と花

小島真作吉

何日の頃からこの店に顔を出すようになったのかははっきりしない。札幌出身のM画伯先輩に連れて行かれたことははっきりしている。東京は新宿のコマ劇場の前通り西武新宿駅の前に入った処にバー「あかしや」がある。狭い石の階段を降りた、地下1階の5坪たらずのカウンターとボックスが2つある小サイが気のきいた店である。ママさんが小樽の人で、小樽のK亭の娘さんであるとか、色白の美人である。「あかしや」の店名のように、あかしやのおし花を額に入れて飾ってあり、M画伯の色紙、油彩の小品も飾っていて、室内の調和をととのえている。店を訪ねると小樽の有名人の話題が出て時間を過すのであるが、小樽出身の私にはふるさとにいるようなサクサクをおこしながら、酔顔のテイで水割の杯を重ねて、何年か前の二紀展に「アカシヤの頃」という題名の100号を描いたことがあるのを思い出すのである。小樽の水天宮山に登って、取材したもので、牛がいてアカシヤの古木が画面をしめていて、港に船がちらついている作画である。酒もうまいが色白のママさんの顔を見ると、アカシヤの花を連想して素晴らしいロマンスが多くあったであろうと、想像させられるのである。

東 政雄

花を生けている妻に、花見に連れて行ってよと話しかけているのは、娘の長女である。

花よりだんごとは女の子である。男のだんごはお酒なのである。酒があっても女性がいないと寂しいのである。男はわがままなのである。花が咲いても若いあでやかさがほしいのである。

私は祖父や父に似ず、酒に縁がうすいのである。子供の頃酒のよくない処を見た精だろ〜……、でも桜の下で三味の音と声高に踊りはおけている風景を見ながら、そぞろ歩きは好なのである。これは春という明るい季節の精だろ〜。

飲めない自分は酒をたしなむ人をうらやましく想うこともある。それは女も花も一層やわらかく美しく見えるようで、酒にかこつけて花も手折れるからである。それに酒は百薬の長とあるからである。でも酒で泣かされる女房も昔から多分に聞かされるのはこまりものである。

いつか「枝折るべからず」の立札の前を、桜の小枝を斜たかついで千鳥足の人も女房への土産か、花には愛着をもっているのだらう。

ともかく、北海道の春は百花満開で、酒よし、女性もまた一層に美しい季節でもある。

熊谷善正

一酒一 茶わん酒で「ケンケンガクガク」の画論？ 猿が玉ねぎの皮をむくような「無」への究明……理論も弁証もない無茶クチャな言葉に酔い、そして最後にかたい握手して互いに意気けんこう、芸術バンザイと。……ぼくの若いときの酒だったが、……最近はどうも顔に出るようになった。

一女一 恋愛だけのダイアナ、ジュノーはsexだけ、知恵だけふりまわすミネルバはどっちもしない。ヴィナスはその両方、恋愛とsex。だから普遍的に例外なく、ヴィナスが愛されるわけだ。女からの触発……は、深刻な哲学が思想され、夢の多い詩や小説が構想され、スペランシ芸術が生み出される。そして文化が向上？ し、社会が流動変化する。……この世に女がなくてはということになるネ。

一花一 「忘れな草、や「宵待草、とあうたびごとに聞かされた唄……。「花」の唄に託して、ボクに……と、ウヌボレた鼻の下の長いこと。「のだ自慢」に出た彼女、「わすれな草をあなたに、あなたに〜、でカーンと、ひとつ。それっきりでした。「咲かぬ花、で、ハナハナ面白くない、ハナシで……。



石塚 潔

▶「酒を飲まないで、いい絵が描けないぞ」絵を描き始めた頃、いつも先輩達にけしかけられ、やきとり屋でよく焼酎をあおった。ところがいつもあげる始末で絵の方は一向によくならず、ほとほと困惑もし絶望もした。他愛のない話であり、当時の純真さは今はもうない。飲み屋の雰囲気が好きになっただけが唯一の成長(?)か。結局酒は、精神開放の麻薬か。いや、特効薬か。

▶その頃、ヌードデッサン会が室蘭でも開かれた。均勢のとれた裸体が目の前に現われると、頭がカーッと鉛筆を持つ手がふるえてデッサンどころではないのではないかと思ったが、現実はいわゆる女として感じなかったのは不思議であった。女として感じない程デッサンに熱中したわけではないが、モデル嬢の毅然(?)たる職業的態度によるものだったかもしれない。セクシャルな意味ではそこにイメージーションがなければ、女として意識しないだらう。久米の仙人ならずとも、ポイン女性の薄物がいちばんだらう。

▶最近貧乏しているのだから、酒にも女にも縁遠くなった。手軽に楽しませてくれるものは季節の花。清楚な野の花がいい。いや、やっぱり夜の花がいいや。

